

## 2009年6月14日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：第一サムエル記3章1～21節

説教題：主よ。お話してください。

### あらすじ

サムエル記は、今からおよそ三千年前に、子供が産まれないことで苦しんでいたハンナというひとりの女性のことから語り始めます。そのことでいじめを受けていたハンナは、あるとき主の前で涙を流しながら祈りました。「男の子を授けてください。」そして次に出てきた祈りは、おそらくハンナも考えたこともなかった意外な祈りでした。「もしこのはしのために男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を主にささげします。」

やがてハンナに男の子が生まれ、サムエルと名づけられました。そのサムエルが幼稚園児くらいになった頃、主に約束したとおりサムエルを主にささげます。祭司エリの所に弟子入りさせ、いっしょに暮らしながら祭司としての訓練を受けていくようになります。

今日の箇所も非常に厳しいことが書かれていて、心がつらくなります。いつも言うのですが、ここにもきちんと神の恵みが示されています。そのことをこれから見て参りたいと思います。

### 1 二度名前を呼ばれた人たち

サムエルは徐々に成長していきます。おそらく、このとき中学生か高校生くらいの年齢になっていたのではないのでしょうか。そのサムエルに主は語りかけられます。しかし、サムエルはそんな経験は初めてでしたので、

てっきりエリに呼ばれたのだと思い、すぐにエリのベッドのそばに走って参ります。そんなことを三度繰り返したとき、エリは初めてこれは特別なことが起きていると気がつきました。そこでエリはサムエルにこう言います。9節。「行って、おやすみ。今度呼ばれたら、『主よ。お話してください。しもべは聞いております』と申し上げなさい。」

まもなく、主はもう一度サムエルを呼ばれます。「サムエル。サムエル。」

聖書には、神御自身が人の名前を呼ぶ場面が何度か出て参ります。しかし名前を二度続けて呼ぶとケースは非常に希です。サムエル以外ではアブラハム、ヤコブ、モーセの三人くらいでしょうか。彼らはどんなときに名前を二度呼ばれたのでしょうか。

アブラハムは、自分のひとり息子イサクをほふりなさいという神の命令を聞きました。命令に従いアブラハムが刀をイサクに振り下ろそうとするまさにその瞬間。「アブラハム。アブラハム。」神はアブラハムの手を止め、イサクを救い出します。

次にヤコブ。息子のヨセフがエジプトで大臣になっていました。飢饉がひどくなったイスラエルから逃れて早くエジプトに来なさいとヨセフが呼んでくれました。嬉しい知らせでした。しかし一方、神の約束の地であるイスラエルを離れることに大きな罪悪感を感じていました。神を裏切ることになるのではないかと恐れていました。そんな中、主は

呼ばれました。「ヤコブよ、ヤコブ。恐れることはない。」

モーセは一介の羊飼いと暮らしていたとき、突然に呼び出されました。「モーセ、モーセ。あなたはエジプトに行って、苦しんでいるイスラエルの民たちを脱出させなさい。」

意味もなく二度名前を呼んだわけではありません。いずれも、何か差し迫った危機感というものがある中で名が呼ばれています。そうしますと、このサムエルの名前が二度呼ばれたことも、何らかの緊急事態が起きていることを示しています。いったい何が起きているのでしょうか。

## 2 主のこゝば

### (1) 「永遠に償うことができない」

主はサムエルに語ります。13、14節。「わたしは彼を永遠にさばくと彼に告げた。それは自分の息子たちが、みずからのろいを招くようなことをしているのを知りながら、彼らを戒めなかった罪のためだ。だから、わたしはエリの家について誓った。エリを家の咎は、いけにえによっても、穀物のささげ物によっても、永遠に償うことはできない。」

エリは息子たちを呼んで一度は叱っています。「子たちよ。そういうことをしてはいけな。」しかし、息子たちは全く聞く耳を持たない。神はそのことをもって「彼らを戒めなかった」と厳しくとがめております。エリを家の咎は非常に重いとされます。

また神は、「いけにえによっても、穀物のささげ物によっても、永遠に償うことはできない」と言われました。罪を償う道が全くもう残されていない。絶対に赦されない。何かそんなふうを受け止めてしまいます。

子どもが悪いことをしていても、それを止めることのできないような親は大変な罪を犯している。その罪はどんなことをしても償うことができない。もし本当にそうであれば、多くの親たちは落ち込んでしまいます。いったいどう理解したらいいのでしょうか。

### (2) 十字架につけられた強盗

イエスが十字架におつきになったことを思い出してみてください。イエスの右と左に強盗人もいっしょに十字架につけられていました。そのうちのひとは主に申し上げました。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」そうしたら主は言われました。

「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」(ルカ 23:42, 43)

十字架刑で処刑されるほどの極悪非道な犯罪を繰り返してきた者であっても、主はその罪を赦し、救っています。

いやそれだけではない。イエスを十字架につけたローマ兵たち、十字架の周りに集まって来て、口々にイエスをののしり、あざ笑う者たちのために主はこう祈られました。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」例え主を十字架につけたとしても、なお赦される道を主は残してくださっている。そのような祈りです。

強盗人であっても、主を十字架につけた者であっても救いの道は開かれていることを教えています。

神はどんなときにも同じお方です。旧約の時代であろうが新約の時代であろうが、変わるはずはありません。では「永遠に償うこと

はできない。」このみことばをどう理解するべきなのでしょう。

### 3 エリの応答

サムエルは主がお語りになったことをしばらく隠しておりました。自分の先生であるエリの家の不祥事について、非常に厳しいさばきの言葉を聞かされました。まだ大人にはなっていなかったとは言え、そのあたりの分別はつくようになっていました。エリには伝えられない方が良く判断します。

ところが、エリはサムエルの微妙な態度の変化を見逃しません。何かを隠していることに気がつきます。神がサムエルに何かを語ったのではないかと。エリには予感のようなものがあつたと思います。神は自分のことについて語ったのではないかと。それもかなり厳しい内容で。その内容を知りたいという思いと、知りたくないという思いの中で揺れたでしょう。

けれども、エリは決断をします。「一つでも私に隠すなら、神がおまえを幾重にも罰せられるように。」少々強引な言葉ですが、エリの決心を表しているのは確かです。サムエルもこうまで言われてしまうと、もう隠すことはできません。全部そのまま主がお語りになったことをエリに告げました。

それを聞いてエリはこう告白します。18節。「その方は主だ。主がみこころにかなうことをなさいますように。」

普通、さばきをすると聞かされたなら、「主のみここになうことをされますように」とはなかなか言えません。エリは、ここまですばりと言われてしまったので、あきらめきつたということなのでしょう。

実は、このエリの告白に非常に良く似た告

白をした信仰者がひとりおられます。前回も取り上げましたヨブです。自分の財産を失い、息子娘たちを失い、そして健康までも奪われたヨブは告白しました。「私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわいも受けなければならぬのではないか。」(ヨブ 2:10) わざわいは確かに苦しいことだけれど、しかし私たちはそのわざわいをも受けなければならない者である。ヨブの言葉とエリの言葉を見比べてみてください。ヨブは積極的、エリは消極的、そんな言葉の違いはありますが、ふたりはほとんど同じ信仰を告白しています。

そうしますと 18 節で、エリは何を告白していることになるのか。エリは自分の罪を主の前に認めているということです。自分は息子たちに対して無力な父親であったことを認めています。その結果、主のいけにえを軽くあしらうことになり、息子たちを重んじてしまったことを認め、そのことで自分は主からさばきを受けなければならない者だと認めています。

エリは言いました。「その方は主だ。」エリは初めて主というお方を知ります。主の前に自分が立たされていることを知ります。きよいお方の前で、自分は何も言い訳することのできない汚れ果てた者であることを認めていきます。自分の汚れを見たなら、神のさばきは避けられない、そのことを自覚していきます。

### 4 償う方法はないのか

さて、ここで大きな矛盾に突き当たります。神は語られました。「いけにえによっても、穀物のさきげ物によっても、永遠に償うことはできない。」ところが今、エリは主の前で

悔い改めに導かれているのです。悔い改めているのに、エリの罪は絶対に赦されないのでしょうか。どんなことをしても、もう罪は償うことができないというのか。もう遅すぎるということでしょうか。

もう一度注意深く主がサムエルに語られた御言葉を読み返してください。「エリの家  
の咎は、いけにえによっても、穀物のささげ物によっても、永遠に償うことはできない。」私たちの目はまず、「永遠に償うことができない」に釘付けとなります。これではもうだめだと、そこで判断してしまいます。

でもそうでしょうか。主が語っておられることを別の表現で言い直してみると理解しやすくなるでしょう。「あなたの罪を償うことは、動物のいけにえにはできない。穀物のささげ物でもできない。しかし、ひとつだけ別のささげ物ささげることによって償うことができる。あなたの罪を償う方法が一つだけある。」そう言っているのです。

ではその方法とは何か。どうすればエリは救われるのでしょうか。

それはかつて、エリもエリの息子たちも知らなかったことです。悔っていたことでした。動物の肉をささげるとは単なる形式的なことであり儀式の一つに過ぎない。目に見えることしか見えませんでした。

しかし主がご覧になっているのは、目に見えることではなくむしろ目に見えない私たちの心です。主は、形としてささげ物をささげたので、それだけをご覧になってよしとされるのではない。ささげる私たちの心をご覧になっているのです。あなたはいったいどんな心を携えて来ましたか。そのことをいつも問いかけておられます。

## 5 主御自身が完全に償ってくださる

エリが救われるただ一つの方法。それは聖書が最初から一貫して私たちに示してくださっている事ですが、ここでもその原則は変わりません。主の前に、私たちは何をささげていくのか。動物ではありません。穀物でもありません。お金でもない。自分の能力でもない。ただ一つ主は、私たちの悔いた心を待っておられる。悔いた心を、主は大切なものとして扱ってくださる。決して粗末に扱うことはありません。

もし、粗末に扱おうとする者がいるならば、神は激しい怒りを現されます。エリの息子たちがそうでした。彼らは人々の悔いた心を、足で踏みつけにしてしまい、何のあわれみの心もかけようとしなかった。だから主は怒る。主は理由もなく怒っているのではない。私たちのことを思って、私たちを救いたい。そのことを邪魔する者には容赦のない厳しい言葉が語られる。主がそこまでして私たちのことを救おうとされています。

エリは、かつてサムエルに教えました。「もし今度主が呼ばれたら、『主よ。お話しください。しもべは聞いております』と申し上げなさい。」エリが語った言葉は、自分に跳ね返ってきました。エリは、サムエルの口を通して主のみことばを聞く者とされていきました。主の御声を聞いたとき、エリは主の前に『しもべ』とされていきます。『この方は主だ』と、主に出会っていきます。

主が、エリに対してこんな厳しいこととお語りになった理由が今わかります。主はエリを救おうとされていたのです。だめな父親でした。祭司の努めということでも、足りないこと沢山あった。けれども、主はエリを愛し、エリを救い出そうと努力を惜しまない。

「サムエル。サムエル。」主は二度、名前を呼ばれました。サムエルを特別に愛しているのでそうしたのではない。主は、エリを助け出したいのです。今すぐに緊急に、エリを助け出したいという主の強い思いから、名前を二度呼ばれました。

このようにして、エリは、主が待っておられた高価なささげ物を主にささげて参りました。エリは救われていきます。

どこまでもあわれみ深い主であることを覚えます。だめな親でも結構、だめな子どもでも、救われるのに十分な資格がある。あれもできない私、これもできない自分。それがどうしたのか。どこに救われない理由があるのか。神を十字架につけた者であっても、主は救おうとされるのです。

私たちを救うために、神がどれほどに心を砕いてくださっているのか、私たちの罪を償うためには、あらゆる事をされる神であることを改めて覚えさせられます。主の恵みに感謝します。